



# 第 1 日 国 語

( 9 : 3 0 ~ 1 0 : 2 0 )

## 注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の 1 ページから 10 ページに、問題が一から四まであります。  
これとは別に解答用紙が 1 枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ね、千鶴は部活どうするの。」しほりんからそう聞かれたとき、千鶴は少し……いや、だいぶむりをして、告白した。「できれば……だけど、わたし、野球部のマネージャーとか、やってみたいなって。」言つたとたんに、ほおがほてつた。マネージャーなんて似あわないって笑われる？ しかし、返ってきたのは意外な声だった。「ほんと？ あたしもマネージャー、あこがれてたんだ。」「え、しほりんも？」「うん、ずっとやってみたかった。ボールミがいたり、試合中に<sup>①</sup>祈ったり、ベンチ入りできない選手をあげましたり。」「ね、やってみたいよね！ やろうよ、ふたりで、マネージャー。」<sup>1</sup>ふたりは手をとりあつてマネージャーになることを誓つた。

そしてその日の放課後、早速、野球部の偵察に行った。ふたりの予想に反して、グラウンドの空気はなごやかだった。先輩も後輩も、なかばふざけながら練習を楽しんでいる様子。そのまったりとした輪のなかに、男もののジャージをだっぴりとはおつた二人の女子もまじっていた。「あれ、マネージャー……かな。」「ん。先輩……だよな。」彼女たちの姿を追うにつれ、千鶴としほりんはふし目がちになった。長い髪をなびかせた三人はとても活発そうで、自信満々で、中学生じゃないみたいにあかぬけていた。部員たちから代わるがわるにちよっかいを出されて、キアキア言っている。千鶴は胸のときめきが急速にしぼんでいくのを感じた。バックネットごしに広がる緑色がかった世界が、あれよあれ

員たち呼びかけた。「一年生が来たから、ちょっと聴かしてやって。」たちまち教室の中心に全員が集めた。先生の指揮棒にたぐられて、その大きなかたまりから蒸気のようにメロディが立ちのぼる。最初はふんわりと。ひとつ、またひとつと音が増え、メロディがふくらむ。ふくらむ。ふくらむ。ひとりひとりのかなでる楽器が、重なることでその音色を深め、引きたて、美しいハーモニーを育てていく。砂浜の波が引いたあとで足もとの砂がすつと動くみたいに、千鶴の心は音のほうへと引きよせられた。曲が終わったときにはすつかり感動していた。なんの曲かもわからない。上手な感想だつてひとことも言えなかったけれど、先生は「またおいで。」と笑ってくれた。

「なんか、すごかったよね。」「うん。すごいよね、吹奏楽部。っていうか、中学生ってすごい！」「ほんと、レベル高かった。小学校の鼓笛隊なんて目じゃないね。」「目じゃない、目じゃない。」「うちらも練習したらあんなふうになれるのかな。」帰り道、ふたりのテンションは高かった。千鶴の感動がしほりに、しほりんの<sup>④</sup>興奮が千鶴にのりうつり、ふたりしてどんどん高まっていくみたいに。

「決めた。あたし、吹奏楽部に入る。千鶴もやろうよ。」しほりに誘われるまでもなく、千鶴の気持ちも吹奏楽部へかたむいていた。放課後の音楽室にいる自分を、千鶴はたやすく想像できた。すぐに上達するほど器用じゃなくても、まじめに練習をつんで、着実に成長していく自分。仲間や先輩たちともそれなりにうまくやっていく。ありありとイメージできる。できすぎる。

よと自分から遠のいていくような。ぴたりと口を閉ざしたしほりんの瞳にも、千鶴と同様のこわばりがある。「どうしよっか。」「帰ろっか。」<sup>2</sup>

以降、ふたりのあいだでマネージャーが話題にのぼることはなかった。陸上部は練習がきびしう。水泳部は水着がはずかしい。考えるほどに、千鶴は自分にびたつとくる部活なんてどこにもない気がしてきた。もともと、運動自体、あまり得意ではないのだ。それでも千鶴が体育系の部活にこだわったのは、「変わりたい」の一心からだつた。ここで文化系の部活を選んでしまつたら、このさきもずっと、自分はこれまでとおなじレベルの上を走りつづけることになる。新しいわたし。いままではちがうわたし。部活は、そんな自分に生まれ変わる最大のチャンスなのだ。

そう思いながらも、足をふみだす方向が定まらずにいたある日の放課後、吹奏楽部の見学につきあつてほしいと、千鶴はしほりにたのまれた。「ひとりじゃ行きづらくて。お願い。」「もちろん。」音楽室は、本校舎からはなれた別棟にある。わたり廊下を進むと、本校舎の喧噪や床の震動が次第に遠のいて、しんとした静けさに<sup>②</sup>包まれていく。

音楽室の戸を開けた瞬間、その<sup>③</sup>静寂をゆさぶる音がした。足もとからはいあがつてくる低音。部屋のあちこちからひびく多彩な音。その音と音とがからみあい、もつれあい、不協和ながらも重層的な音のかたまりを生んでいる。「見学？」教室のすみで新入部員の指導をしていた顧問の先生が、千鶴としほりに気がついた。「入つておいで。」と手まねきする。ふたりが足をふみいれるなり、先生はぱんと両手を打つて部

「あのね、わたし……中学生になったら、変わりたいって、思つてたんだ。」千鶴は初めてしほりに打ちあけた。「いままではちがう自分になりたくて。吹奏楽部は、すごいと思うし、すぐくやってみて……でも、それじゃ、いままでのわたしといつしよつて気もして……。」うまく言えない。じれったくだまりこむ千鶴の横顔を、しほりんがじつと見つめている。千鶴が本気のとき、しほりんはいつもおなじくらしいの本気で、なにかを返そうとしてくれる。

「うん。」胸もとのスカーフをのぞきこむように、しほりんはこくんとうなずいて言った。「わかるよ。千鶴の気持ち。」「え。」「あたしも、そんなふうにいることあるし。」「しほりんも？」「うん。でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う。」「そうかな。」「わざと自分らしくないことをするより、千鶴は千鶴らしいことをして、いままでの千鶴以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでもどちがう千鶴がいるんじゃないのかな。」

千鶴は千鶴らしいことをして、いままで以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでどちがう千鶴がいる……。千鶴はその言葉を吸いこんだ。とたん、夕焼け空が朝焼けみたいに光りかたを変えた。「うん。そうかも。そうならいいな。」すうつと肩から力がぬけた。「ありがとう、しほりん。わたし、決めた。明日、入部届けもつていくよ。」

(森 絵都 「クラスメイツ」前期)による。

1 ①④の漢字の読みを書きなさい。

2 ふたりは手をとりあつてマネージャーになることを誓つたとあるが、このときの千鶴としほりんの様子を表現した四字熟語として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 四苦八苦 イ 試行錯誤 ウ 一喜一憂 エ 意気投合

3 以降、ふたりのあいだでマネージャーが話題にのぼることはなかったとあるが、これが意味していることを述べた次の文の空欄Iにあてはまる適切な表現を書きなさい。

これは、千鶴としほりんがマネージャーになるのを（I）ことを意味している。

5 第五段落における描写とそれに用いられている表現技法を説明したものとして最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 「足もとからはいあがつてくる低音。」という描写は、その音が千鶴にはとても不気味に感じられるものであることを、倒置によつて表している。

イ 「不協和ながらも重層的な音のかたまり」という描写は、千鶴に聞こえてくる音の雰囲気が重苦しいものであることを、隠喩によつて表している。

ウ 「メロディがふくらむ。ふくらむ。ふくらむ。」という描写は、千鶴の期待が音楽に合わせて次第に高まっていく様子を、対句によつて表している。

エ 「砂浜の波が引いたあとで足もとの砂がすつと動くみたいに」という描写は、千鶴が演奏に自然と聞き入っていく様子を、直喩によつて表している。

4 夕焼け空が朝焼けみたいに光りかたを変えたとあるが、この描写について、国語の時間に生徒が次のような話し合いをしました。空欄IIにあてはまる適切な表現を、それぞれ四十字以内で書きなさい。ただし、空欄IIは、「……」と思ひながらも、……気がしていた」という形式によつて書くこと。

山本… この描写は、どんなことを表しているのかな。

中村… 「朝焼けみたいに」とあるから、暗かつたものが明るくなってきたことを表しているんじゃないかな。

木村… それは千鶴の気持ちの変化を表しているんだと思うよ。

山本… なるほど。具体的には、どのような変化だろう。

木村… 吹奏楽部を見学する前は、「足をふみだす方向が定まらずにいた」とあり、迷っていることが分かるね。これは、自分を変えたいという一心で（II）からだね。

中村… そのあと吹奏楽部を見学して、「千鶴の気持ちも吹奏楽部へかたむいていた」とあるけれど、一方で、吹奏楽部では変われないという気もして、やはりふみだせずに迷っているよね。

山本… そうか。それで、しほりんの言葉を聞いて、吹奏楽部に入部しても、（III）（ ）ということに納得し、迷いがなくなつて気持ちが明るくなつてきたんだね。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人間の「ことば」において、「あらわすもの」(音)と「あらわされるもの」(意味)を結びつける本質的根拠は、実はどこにもありません。例えば「あげる」という単語でいうと、「ヘアゲル」という「音の連なり」と、(下から上への移動)という「意味」が結びつけられることに、そうでなければならぬという必然的な理由は無いのです。この両者は、日本語の社会でだけ通用する「約束」によつて結びついているにすぎないのです。

音と意味との結びつきは社会ごとに決まるものですから、社会が違えば音と意味との結びつきかたも違ってきます。また同じ社会の中でも、時間がたてば音と意味との結びつきがずれていたり、あるいは全然別の結びつきに取って代わられたり、といったことが当然のように起こるのです。このようなことは、単語の意味についてだけでなく、文法的な規則や字体についても当てはまります。要するに、ことばにおいて絶対的に「正しい」といえるものはどこにもないのです。ただ、ある時点のある人間集団において「正しいとされていること」があるだけです。

ことばについて、「正しさ」というものはつきりさせておかないと困るような場面も、社会の中には確かに①ソクサイします。

「教育」という場面がその典型例でしょう。例えば子どもに漢字を教える②サイ、「この漢字にはいろんな字体があります。どれでもいいですから好きな書き方をしてください。」と言われては、子どもは混乱して

しまうでしょう。ひとつの漢字にはいろいろな字体があり、現実の社会ではかなり広い範囲の字体がキョウウ<sup>③</sup>されています。しかし少なくとも初歩の段階では、ひとつの「お手本」を示し、「この漢字はこのとおりに書きなさい。」とはつきり指導した方がうまくいくでしょう。

こうした場面においては、「これが正しいことばである」と決めるための基準をはつきりと示しておく必要があります。このように、意識的・<sup>1</sup>明示的に与えられた「正しさ判定のよりどころ」のことを、ここでことばの「規範」と呼ぶことにしましょう。「規範」は、教科書に示された漢字の「お手本」や、辞書における単語の意味記述、文法書における文法規則の説明などといった形をとってあらわれます。あるいは文書として書かれたものでなくても、教育の現場でことばのある側面について「ここはこうしなさい。」と明確な形で与えられる指導も「規範」ということになりま。

ことばの「規範」は、教育以外の場面においても有効な<sup>④</sup>ハタラキを持っていきます。それは、「ことばを用いたコミュニケーションを円滑に進ませる」という機能です。

前に述べたとおり、ことばの「あらわすもの」と「あらわされるもの」の結びつきは、放っておくとだんだん緩くなっていき、<sup>2</sup>「あらわすもの」と「あらわされるもの」の対応関係がずれてしまうことがあります。つまり、同じ「あらわすもの」を提示されたときでも、どのような「あらわされるもの」を了解するかが人によって違ってしまふ、ということが起きるのです。こうしたずれが大きくなりすぎ

「規範」というと、「従わなければならないもの」というイメージで見られることがあるかもしれませんが、その一方で、「ことばによる社会生活を円滑に進めていくためのもの」という積極的な意味を持つものとしてとらえることもできるのです。

(宇佐美 洋)「ことばの「正しさ」とは何か」による。

1 ①～④のカタカナにあたる漢字を書きなさい。

2  にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア しかし イ つまり ウ 例えば エ なぜなら

3 <sup>1</sup>明示と熟語の構成が同じものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 高低 イ 関係 ウ 急変 エ 炊飯

4 <sup>2</sup>「あらわすもの」と「あらわされるもの」の対応関係がずれてしまうことがあります。とあるが、時間がたつとともにそのようなことが起こるのはなぜですか。この文章における筆者の主張を踏まえて四十五字以内で書きなさい。

ると、ことばを用いたコミュニケーションは成り立たなくなってしまう。しかしそういうとき、とりあえずひとつの明確な「よりどころ」があれば、それを最小限に抑えておくことができるはずだ。

また、「規範」として選ばれることばの形や使い方というのは多くの場合、長年社会の中で広く流通してきたものです。したがってその形に従っていけば、他人に違和感・不快感を与えることが少なく済む、ということも言えます。コミュニケーションを円滑に進めるためには、<sup>3</sup>ま

ずもって相手を不愉快にしない、というのが第一条件でしょう。したがって不特定多数の人に対して話したり書いたりするときには、できるだけ多くの人に広く受け入れられている表現を使っておくのが無難だといえます。

さらに、「規範」に従って振る舞うことは、「自分が常識を備えた人間であることを示せる」という機能も持っています。

一口に「規範」といっても、中には習得がかなり困難なものも含まれています。例えば「敬語」などがその最たるものでしょう。ですから敬語を、教科書や文法書に書かれたような形できちんと使いこなせるということは、その人が「十分に社会的訓練を受けた、知識・常識を備えた人である」ということを間接的に示すことになり、それは社会的な信頼を得ることにもつながるのです。一般には意識されることが少ないかもしれませんが、「社会的信頼を得るための手段となり得る」ということは、ことばの「規範」というものが持つかなり重要な機能であるといえます。

5 この文章において、筆者は、ことばの「規範」を踏まえることによる効果を三つ述べています。次の表は、それぞれの効果について、筆者の主張を踏まえてまとめたものです。これについて、あとの(1)・(2)に答えなさい。

	まとめ
【効果1】	「教育」の場面において、ことばの「規範」を示すことで、「これが正しいことばである」という基準を明確にできる。
【効果2】	「規範」に従った形でことばを使うことで、他人に違和感や不快感をあまり与えずに済み、コミュニケーションを円滑に進めることができる。
【効果3】	「規範」に従った形でことばを使いこなすことで、 ( ) ( ) ( ) につながる。

(1) 次の文は、表中の【効果1】について述べたものです。空欄aにあてはまる最も適切な語を、文章中から抜き出して書きなさい。

「規範」が示されると、どのようなことばが正しいのかということについて、学習する人は ( a ) せずに済む。

(2) 表中の空欄Iにあてはまる適切な表現を、三十字以内で書きなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある芸者、藤十郎に問うて曰く、「我も人も、初日にはせりふなま覚、  
歌舞伎役者

えなる故か、<sup>1</sup>うろたゆるなり。こなたは、十日二十日もし慣れたる

あなた

十日も二十日も公演し慣れた

狂言なさるるやうなり。いかなる御心入りありてや承りたし。」<sup>2</sup>答へ

芝居をなさるやうだ

どのようなお心構えがあるのかお聞きしたい

て曰く、「我も初日は同じく、うろたゆるなり。しかれども、よそ目

にし慣れたる狂言をするやうに見ゆるは、の時、せりふをよ

く覚え、初日には、根本根から忘れて、舞台にて相手のせりふを聞き、その

時思ひ出してせりふを言ふなり。その故は、常々人と寄り合ひ、あるい

集まって話し合

は喧嘩口論するに、かねてせりふにたくみなし。相手の言ふ詞を聞き、

あらかじめせりふを用意しておく、ことばない

こちら初めて返答心に浮かむ。狂言は常を手本と思ふ故、稽古にはよく

浮かぶ

日常

覚え、初日には忘れて出るとなり。」  
とどうことだ

(「耳塵集」による。)

(注) 藤十郎 Ⅱ 初代坂田藤十郎。江戸時代の優れた歌舞伎役者。

1  にはあてはまる最も適切な語を、文章中から抜き出して書  
きなさい。

2 うろたゆるなりとあるが、この芸者は、うろたえてしまう理由と  
してどのようなことを挙げていますか。次のア～エの中から最も適切  
なものを選び、その記号を書きなさい。

ア 歌舞伎役者になったばかりだということ。

イ せりふをすっかり覚えていないということ。

ウ 十日も二十日も公演しているということ。

エ 相手のせりふを聞いてしまうということ。

3 答へてのひらがなの部分を、現代かなづかいで書きなさい。

4 この文章における藤十郎の芝居に対する心構えについて、ある中学  
生が次のようにまとめました。空欄Ⅰにあてはまる適切な表現を、現  
代の言葉を用いて二十五字以内で書きなさい。また、空欄Ⅱにあては  
まる最も適切な語を、あとのア～エの中から選び、その記号を書きな  
さい。

藤十郎によれば、日常の会話では、せりふをあらかじめ用意す  
るということはなく、(Ⅰ) (Ⅱ) ものだという。藤十郎は、  
そのような日常の会話を手本として、初日の舞台に出るときには  
覚えたせりふを一度忘れ、(Ⅲ) 演技をしようと思がけてい  
たのだといえる。

ア 奇抜な イ 優雅な ウ 軽快な エ 自然な

問題は、次のページに続きます。

